

方 広 寺

(財)京都市埋蔵文化財研究所 網 伸也

1、京の大仏

豊臣秀吉が関白となり豊臣姓を賜った翌年の天正14年（1586）、東福寺周辺において大仏殿の建立が計画されます。大仏といえば今も昔も南都東大寺ですが、東大寺大仏殿は松永久秀の兵火によって永禄10年（1567）に焼け落ちていました。「天下人」となった秀吉は南都東大寺の再建ではなく、自らの権威のモニュメントとして新しく京の東山に大仏を建立しようとしたのです。後に、豊臣家の命運と足並みを揃えるかのように数奇な運命をたどった京の大仏、方広寺です。

方広寺の造営は、実際には聚楽第の造営などと重なったために遅れ、三十三間堂の北側に場所を変えて天正16年から本格的に開始されます。5年で東大寺大仏殿よりも大きな仏殿と大仏を建立するという強行スケジュールで、大仏殿の部材は諸大名によって全国から集められました。例えば、徳川家康は富士山から材木の提供を命じられており、現在世界遺産となっている屋久島の杉も島津義弘によって切り出されたと伝えています。全国の良材を使って造営された大仏殿は、正面桁行が約90m、高さは50mに達する堅牢壮大な建造物でした。

これに対し、大仏は工期短縮のため金銅仏での鑄造ではなく、木造仏に漆喰を塗って高さ20m近い大仏を造営しました。漆喰仏の構想は中国明の技術を採用したのですが、これが裏目に出てしまいます。いよいよ大仏供養会を間近に控えた文禄5年（1596）閏7月、大地震が京を襲い（慶長大地震）、大仏殿はほとんど無傷であったにも関わらず、大仏は漆喰のため崩れ落ちてしまったのです。結局、秀吉は大仏の完成をみることなく、慶長3年（1598）年8月に亡くなりました。

その後、方広寺の造営は秀頼が受け継ぎ、大仏を新たに金銅仏として再興します。また、大仏殿を巡る築地を回廊に建て替え、蓮華王院も寺院地に包括して太閤塀を構築するなど、伽藍の整備も進められました。しかし、慶長7年に鑄造中の大仏から出火して大仏殿が焼け落ち、慶長13年に再度復興が企画された大仏も、慶長19年に「国家安康」「君臣豊楽」の銘文が問題となって開眼供養が延期され、大阪夏の陣による豊臣氏滅亡の引きがねとなった逸話はあまりに有名です。方広寺の歴史は、まさに豊臣氏落日の歴史でもあったのです。

方広寺大仏殿の遺構は、京都国立博物館の敷地北側において基壇外装・南階段・礎石の根固め・大仏台座を良好な状態で発見しています。基壇上面には四半敷きの敷石が一部良好に残っており、大仏台座は径約34mの八角形に復元できます。また、礎石を据えた根固めは直径5mにわたって礫を詰めており、柱間は推定で約8mもあります。これらの遺構は、慶長大地震でもびくともしなかった堅

牢壮大な大仏殿の一端を示す貴重な資料といえます。

2、石壇ヲツミ土ヲ上テ

天正16年5月初旬、方広寺大仏殿の造成がいよいよ始まりました。興福寺に伝わる『多聞院日記』はその時の様子を、「京には大仏建立とて、石壇をつみ土を上て、其上にて洛中上下の衆に餅酒下行して躍らせらるる、ことごとしき普請なり」と記しています。大仏殿の造成に石塁を積み上げ、その上で京の上下京の町衆を躍らせているのです。動員された町衆は上京から2000人、下京から2000人。餅や酒が振る舞われ、子供から年寄まで笛太鼓の音頭に合わせて踊ったといえます。何やら楽しそうな情景が思い浮かびますが、踊りにかこつけて大勢の町衆に大仏殿の基盤を築き固めさせたのが実態のようです。

方広寺の旧境内は東から西へ緩やかに下る傾斜地で、東側の斜面を削り西側を整地して平場を形成しています。正面西側の石塁は高さ約3mにも及び、大規模な造成工事が行われました。発掘調査でも小さな谷筋を埋めて整地を行った痕跡を発見おり、単純計算すると大仏殿の平場全体を造成するのに約55000m³の盛土を行ったことが判明しています。これらの盛土を町衆が踊りながら築き固めたのであり、大仏殿の礎造りに京の町衆の参加が強要されたのです。

また、石塁の裏込めの中には、石仏や五輪塔などの石造仏が多数含まれており、中には意図的に叩き割られたものもあります。これらの石造物も京中や周辺から強制的に集められたのでしょう。町衆だけでなく、彼らの素朴な信仰対象をも部材として駆り出させたところに、方広寺造営の本質が現れています。

さらに、天正16年7月に発布された有名な刀狩令では、百姓から武具を徴収する口実として大仏殿の部材利用による仏恩が強調されています。また、耳塚が大仏殿の正面に造営されていますが、文禄・慶長の役（朝鮮半島への対外戦争）の供養塔という性格だけでなく、仰ぎ見る民衆へのみせしめ効果も狙った可能性があります。

方広寺は、天下統一を成し遂げた秀吉の偉業を讃え、永代にわたる豊臣氏の繁栄を祈念するために造営された寺院であり、宗教の名のもとに民衆支配を行う装置という側面も合わせもっていました。大仏殿に葺かれた大仏瓦の軒先に桐文が飾れているのは、まさに民衆の上に立つ秀吉そして天下の主たる豊臣家を象徴しているのです。

3、秀頼の方広寺再建と国家安康の鐘

秀吉は慶長3年8月18日、伏見城でその波乱万丈の生涯を終えます。年が明けた慶長4年4月に秀吉は遺言とおり阿弥陀ヶ峰に埋葬され、豊国大明神として豊国社に祀られました。また、豊国社の造営と同時に方広寺大仏の再建も計画されます。大仏は慶長大地震によって崩壊しており、秀吉の死後4日目に本尊不在のまま大仏殿供養が挙行されるという状況でした。秀頼は秀吉の意志を継ぎ、金銅

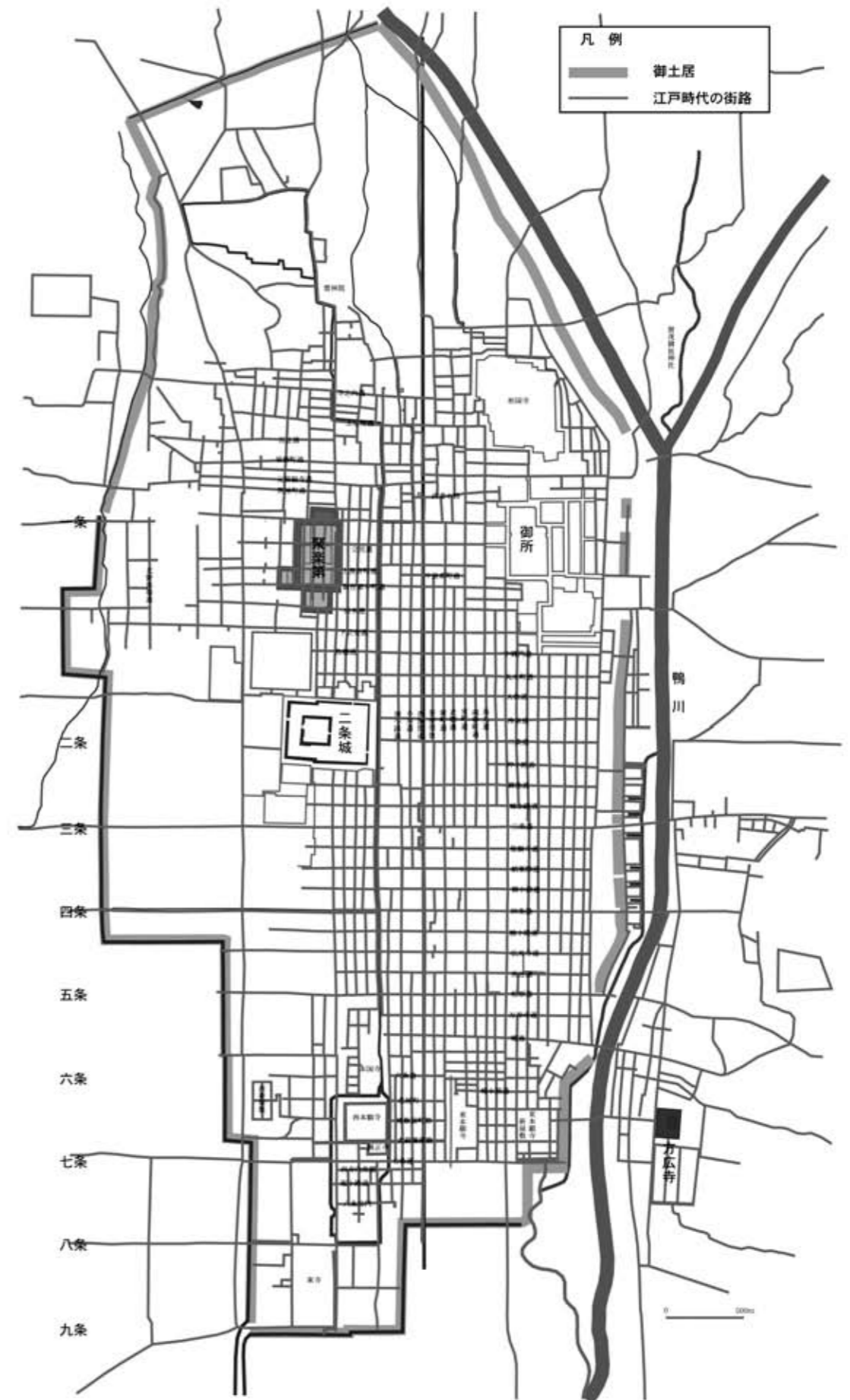
仏として大仏を再建するとともに、豊国社と一体となった方広寺伽藍の整備に着手し始めます。

まず、大地震で大仏とともに崩れた築地を回廊に改め、七重塔と講堂の縄張りも始められたようです。発掘調査では南回廊と南門の遺構を発見しています。礎石は失われていましたが、礎石を据え付けた痕跡が礫を積み込んだ壺掘地業として残っていました。それらの配置から、蓮華王院南大門と同じ構造の八脚門であることが判明しました。また、回廊は『洛中洛外図』などには単廊で描かれているのに対し、実際は複廊構造であることがわかりました。八脚門構造である南門とともに格式の高さを、残された遺構から窺うことができます。さらに、三十三間堂を修理するとともに南大門・西大門・築地を新たに築いて方広寺の伽藍地内に取り込みました。現在残る蓮華王院南門と太閤塀はこの時のものです。

ただ、慶長5年の関ヶ原の戦い以後は、豊臣家の孤立化と対応するかのように伽藍再建に暗雲の兆しが見えはじめます。七重塔と講堂の建立計画は頓挫し、豊国社の極楽門は徳川家康の手によって竹生島へ寄進されています。そして、慶長7年暮れには鑄造中の大仏本体より火が出て、不運にも堅牢壮大を誇った大仏殿は焼け落ちてしまいました。その後、慶長13年には秀頼による2度目の再建が企画されます。時代は徳川の世に移っていましたが豊臣家の財力は未だ大きく、年長してきた秀頼への人望も無視できなくなります。秀頼は方広寺をはじめとする諸寺の再建を行いますが、これは家康にとって豊臣家の財力を浪費させる絶好の機会であり、進んで奨励したのです。

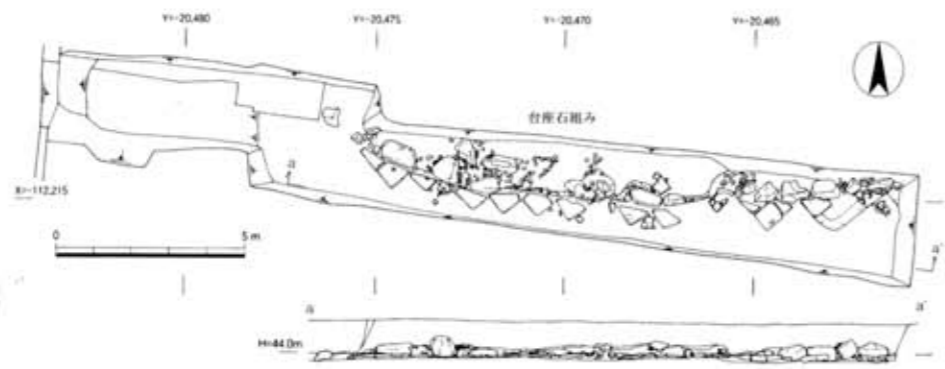
ところが、ようやく大仏殿が完成し開眼供養を翌月にひかえた慶長19年7月、「国家安康」「君臣豊楽」の梵鐘銘文に対して、家康を呪詛する内容だと徳川方から難題がつき、開眼供養はまた延期になります。そして、この事件を契機として徳川方と豊臣方の対立は深まり、大阪冬の陣・夏の陣が勃発して豊臣家は滅亡してしまいました。皮肉なことに父秀吉と同じく秀頼も、間近にひかえた大仏開眼供養を見ることなく戦乱の世に露と消えてしまったのです。

現在、方広寺の鐘楼に、慶長19年四月完成の「国家安康」の大鐘が遺存しています。『洛中洛外図』をみると、方広寺の鐘楼は元来大仏殿南回廊の南、三十三間堂との間に描かれています。発掘調査では南門の南西、南辺石塁の南で大規模な鑄造関係の土坑を検出しており、ここで「国家安康」の大鐘を鑄造したのかもしれませんが。

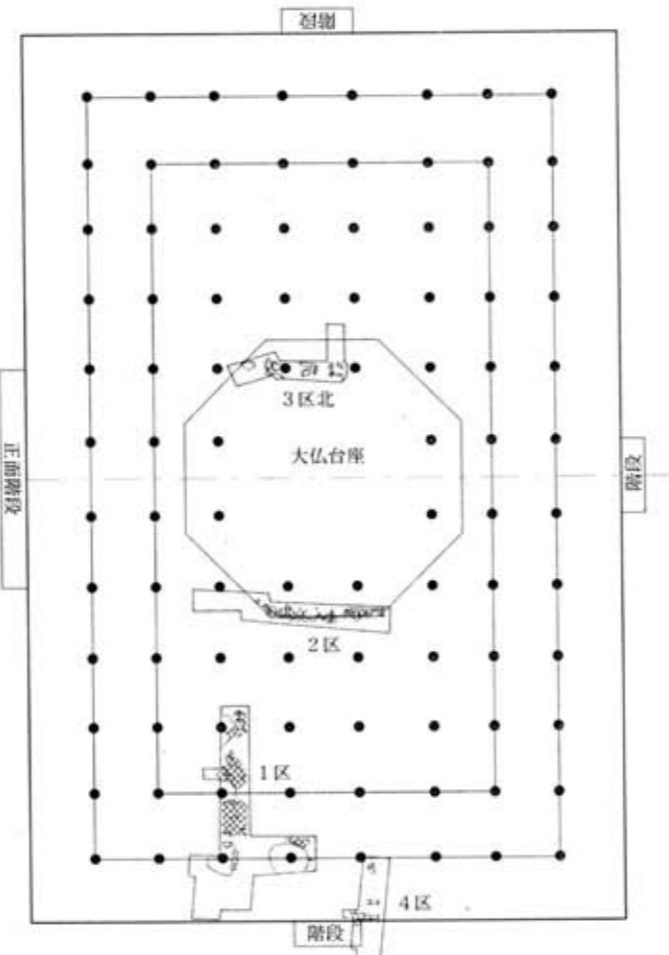


御土居・方広寺・聚楽第・二条城など位置関係図

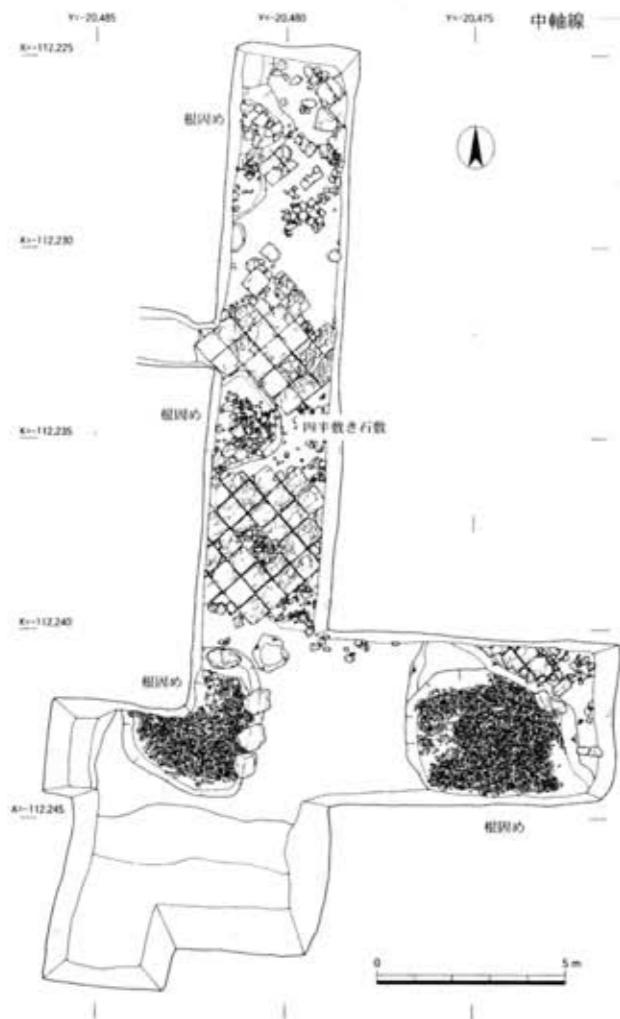
2区



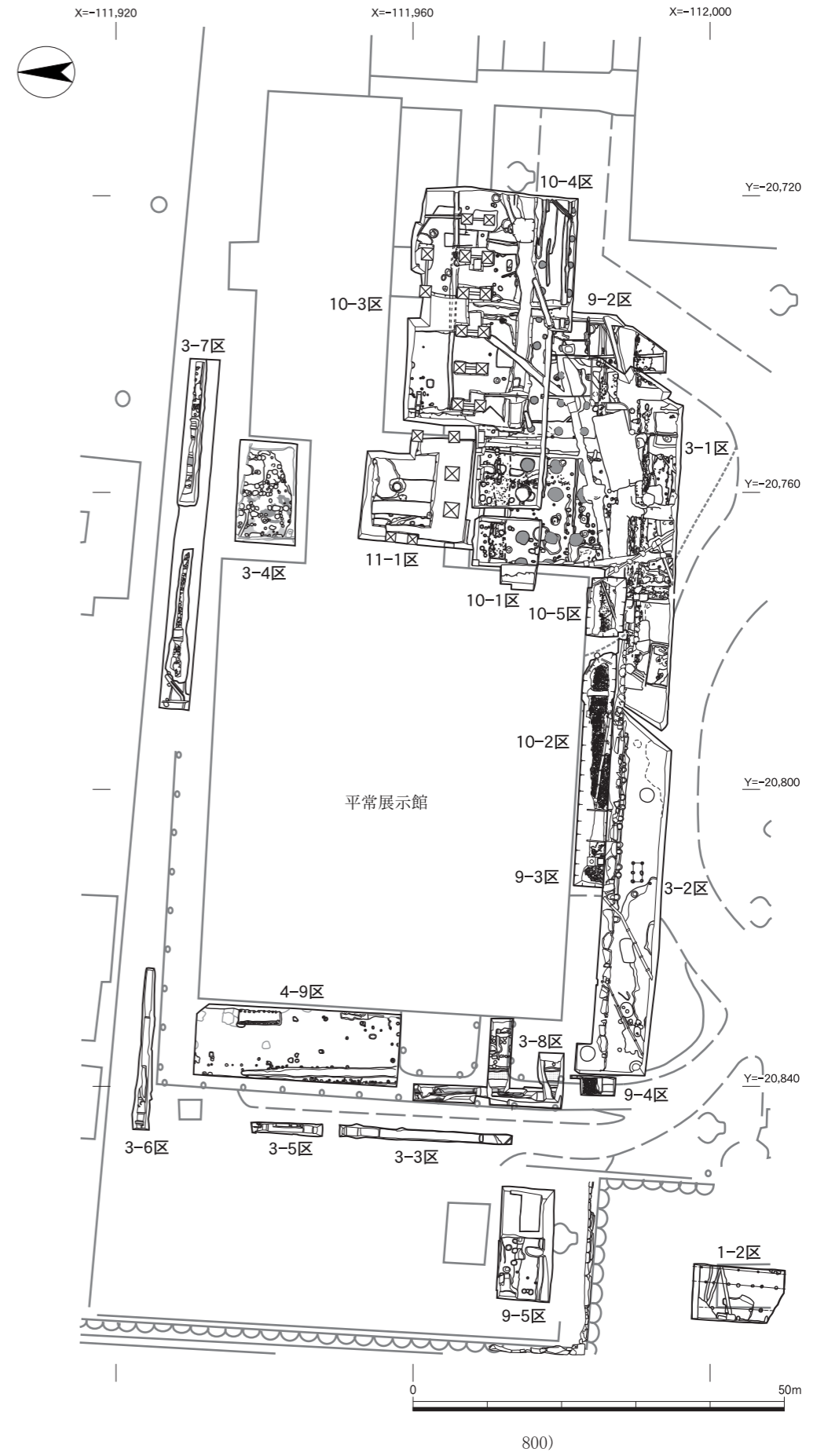
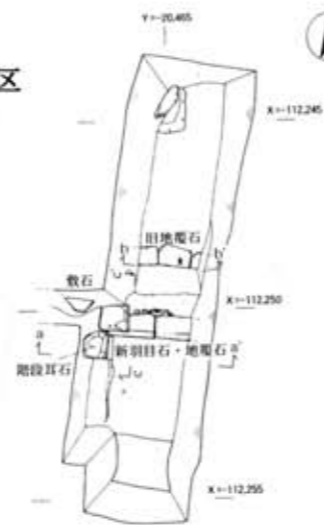
大仏殿調査区と復原図



1区

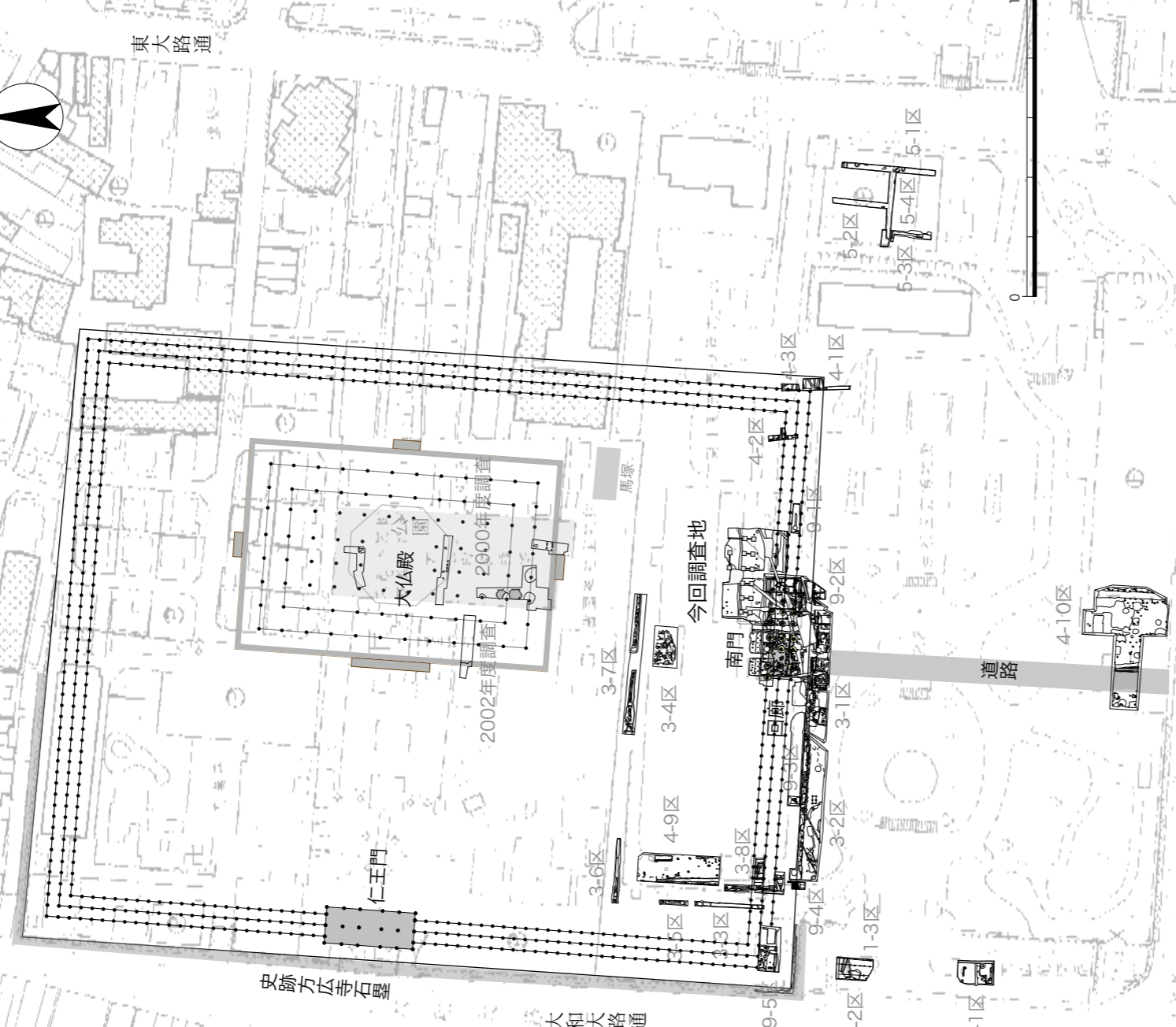


4区



南門周辺遺構配置図

方広寺発掘調査位置図・伽藍復原図



正面通

耳塚



石基跡 1998年度調査(南東より)

七条通

- 調査年度
- 1- 1994年～1995年
 - 3- 1998年
 - 4- 1999年
 - 5- 2000年
 - 9- 2008年



南門跡 1998年度調査(北より)

三十三間堂

大開扉

南大門



豊国神社祭図 部分（豊国神社蔵）
『桃山の美術』1992 岩波書店より



洛中洛外図 右隻1・2・3扇部分（京都国立博物館蔵）
『洛中洛外図』1997 京都国立博物館編より

方広寺略年表

天正13年	1585	秀吉、関白となる。
天正14年	1586	聚楽第造営開始。
		大仏殿建立の地を「東福寺近傍」と定め、諸大名に用材の諸国運上を命じる。
天正15年	1587	聚楽第ほぼ完成し、秀吉、大坂より移る。
天正16年	1588	大仏殿建立再開。建立地を蓮華王院（三十三間堂）北側に変更。
天正19年	1591	大仏殿立柱式行われる。
		御土居築造。同年中に完成。
文禄2年	1593	方広寺大仏殿上棟を行う。
文禄3年	1594	伏見城完成、秀吉移る。
文禄4年	1595	大仏殿ほぼ完成。
慶長元年	1596	畿内に大地震。方広寺大仏と築地大破。
慶長3年	1598	8月18日、秀吉伏見城にて死去。
		豊国社の造営開始。
慶長4年	1599	蓮華王院南大門・西大門および西・南延べ230間半におよぶ土塀（太閤塀）を築く。
慶長5年	1600	秀頼、方広寺大仏殿再建開始。新たに回廊の建立を始める。
慶長7年	1602	鑄造中の大仏より出火、炎上。
慶長13年	1608	秀頼、再度大仏復興を企図。費角・用材の準備。
慶長16年	1611	6月、大仏殿地鎮祭。8月、立柱式。
慶長17年	1612	大仏に金箔が押され、台座・敷石など大半が完成。
慶長19年	1614	梵鐘完成。家康、梵鐘銘文に異議をとらえ大仏開眼供養の延期を命じる。
元和元年	1615	大坂夏の陣。豊臣氏滅亡。
		家康、豊国社の破却を決定。大仏殿は妙法院が管理する。
寛文2年	1662	地震にて大仏大破。木像に造り替えられる。
寛政10年	1798	大仏殿本堂に落雷、出火。本堂、楼門、大仏焼失。
天保年間	1830-44	尾張国の有志が半身の像を造り、仮堂に安置。
明治3年	1870	方広寺境内地が上地された後、その一画に御所に安置されていた仏像や位牌を祀る恭明宮を創設。
明治8年	1875	豊国神社を再建。方広寺の境内地をさいて新社地とする。
明治17年	1884	鐘楼を再建。
明治25年	1892	明治9年に廃止された、恭明宮の跡地に陳列館の建築に着工する。同28年竣工。
明治33年	1900	京都帝国博物館に改称される。
昭和44年	1969	「方広寺石塁および石塔」国史跡に指定。



大仏台座



大仏台座と刻印のある敷石



大仏殿南階段の規模



南階段と地覆石



基壇の石敷きと礎石抜き取り穴



基壇の石敷き



礎石の根石



礎石の根石と石敷き



南門と南回廊の根石



南回廊の根石



南面の石塁